慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	明治後期における旧制高等学校受験生と予備校
Sub Title	Examinees of the higher schools and yobikos in the latter half of Meiji era
Author	吉野, 剛弘(Yoshino, Takehiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2000
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.51 (2000.) ,p.31- 42
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000051-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

明治後期における旧制高等学校受験生と予備校

Examinees of the Higher Schools and Yobikos in the Latter Half of Meiji Era

吉　野　剛　弘*
Takehiro Yoshino

After Kotogakko-Rei (Imperial Ordinance Relating to Higher Schools) in 1894, as applicants for higher schools (Kyusei Kotogakko) increased, the entrance examination of higher schools became harsh. This article focuses on how examinees prepare for the entrance examination in the latter half of the Meiji era (approximately from1895 to 1910) and how yobikos (preparatory schools for the entrance examination) developed accordingly in those days.

In the latter half of the Meiji era, most of examinees longed for the admission to Ichi-Ko (The 1st Higher School, in Tokyo) and many examinees of those days prepare for the entrance examination in Tokyo. That is supposed to be derived not only from the lack of opportunities for the preparation in the country but also from examinees' longing for the metropolis, Tokyo. Despite the frequent change of the screening method, the tendency and the attitude of the examinees didn't change because of the privilege higher school student could enjoy.

Yobikos developed especially in Tokyo that had many students. Though yobikos had been in existence since the early Meiji era, they changed into the earnest 1-year institutions for the preparation for the entrance examination. To administrate yobiko was profitable to the administrator because it could attract a number of students.

はじめに

1894（明治27）年の高等学校令により，それまで存在していた高等中学校をもとに旧制高等学校が成立した。この旧制高等学校は1918（大正7）年の高等学校令改正により当初専門教育機関として構想されながら大学の予備教育機関となっていたものから高等普通教育機関へとその性格を変えることになるが，1950（昭和25）年まで存続したのであった。

日清戦争から日露戦争にかけての間に，中学校の学校数は増加し，進学者も増加した。この中学校の増加によって小学校から帝国大学にいたるまでの学校階梯が実質的に完成することになるが，こうなると学力的にもかつてより高い中等教育修了者が多く輩出され，帝国大学への進学が事実上保証されている旧制高等学校への入学志望者が増えてきた。しかし当時は予算不足などの理由もあって学校増設は難しかったため，その入学試験の競争率は1898（明治31）年には2倍をこえ，1901（明治34）年には3倍となり，その後倍率が低下する年もあったが全体としては上昇した。受験者が増える以上旧制高等学校入試も年々厳しくなっていった。1902（明治35）年に総合選抜制が導入され，それは1907（明治40）年まで続いた。総合選抜制は，「各高等學校大學豫科に學力優等の者を入學せしめんが爲め來學年より入學試驗は問題を同一にし同一試驗委員をして其答案を調査採點せしめんとす」という第6回高等教育会議（1901（明治34）．11.25～30）に提出された諮問案の前文からして，当時盛んに言われていた高等学校増設を要求する世論の流れ[1]とも，また学制改革論議の中での旧制高等学校廃止を求める声[2]とも全く無関係であり，あくまで成績優

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻博士課程（日本教育史）

秀者を採ることを企図していたものであることがわかる。当時東京と京都の2つしかない帝国大学の学生を供給する高等学校の学生が，高等学校入学時においてその入学する学校によって合格基準となる学力が違うということでは困るからである。

しかしその一方で入試に対する批判もあった。総合選抜制に対する反対や疑義を唱える声は導入前から存在したし[3]，難問奇問を指摘する声も1905（明治38）年ごろにはあがっていた。またその年には政府の側からも試験問題に関する通牒などで難問奇問を排除することが指示されていたし，その年度の入学試験の報告ではそのような通牒を踏まえて入試問題の難易度に注意したともある[4]。そして，かねてから問題となっていた中学校との学力的な接続の問題については，1906（明治39）年の文部省の中学校長への調査によると高等学校入試は難しすぎるという意見が多かったことからして，この時期に至っても解決されなかったといえる。

この総合選抜制に限らず明治後期の旧制高等学校入試においてはしばしばその選抜方法に改革がみられた。1894（明治27）年の高等学校令以降，1896（明治29）年に高等中学校期以来残っていた学区制を廃止し，1900（明治33）年に入試日程を各学校共通にし，翌1901（明治34）年には共通問題で入試を行うことにし，総合選抜制廃止後の1909（明治42）年からは再び共通問題で選抜を行うことになった[5]。その意味で明治後期の旧制高等学校入試は共通試験や総合選抜制により適格者選抜の性格をより強める方向性を模索しつつも混迷を極めていたということができる[6]。

旧制高等学校入試が混迷を極める中で，その受験生はどのように受験準備にあたっていたのだろうか。また，これまでの筆者の研究[7]によれば，現代のような1年間の受験準備教育を施す予備校の発生は明治30年代のことであり，明治30年代後半からその数を増やしていく。さらに模擬試験が行われるようになるなど，ちょうどこの時期にいわば受験社会の雛形が成立するのである。そこでその予備校の設立理由が問題になるが，これに対する明確な回答はこれまでのところ存在しない。当時の予備校はその設立形態から4種類に類別されるが[8]，これまでの研究で設立の経緯を十分に説明しうるのは私立大学系の予備校のみである。このタイプの予備校は1903（明治36）年の専門学校令を受けて設立されたと考えることができる。その他の予備校の設立に関しては，教育制度の整備による高等学校受験者の増加をうけて設立をみたという以上の説明はないのである。需要に対する供給という意味においてその説明自体は誤りではないが，度重なる入試改革が何らかの影響を与えているということはありえないのだろうか。

ところで，この時期の受験生や予備校に関する先行研究は決して多くはない。受験生という匿名の集団の実態は伝統的な教育史の手法ではとらえにくいものであったし，予備校についても正規の学校系統からは外れたものであり，その実態を示す公文書等の一次史料に乏しいからである。その中で本論文の先行研究となりうるものをあげておくことにする。受験生の動態に関する研究は教育社会学における社会史研究のものがあり，その代表的なものとして竹内洋『立志・苦学・出世』（講談社現代新書，1991）があげられるが，時代的に広範にわたるため特定の時期の実態についての詳細な分析に乏しい部分がある。しかし，その方法論は大いに参考になることも事実であり，本論文でも竹内の手法にのっとり，雑誌『中学世界』や進学案内書などを用いて受験生の実態を明らかにしていく。予備校に関しては竹内の前掲書でも言及が見られるが，もっとも詳細な検討をしたものとしては関口義「各種学校の研究⑥—明治後期における各種学校(4)—」（『各種学校教育』第7号，1965）がある。しかし，関口論文は各種学校のひとつとしての予備校という研究であり，当時の実態という意味では情報に乏しい。そこで，予備校に関しても雑誌なども参照しつつその実態に迫ることにする。

1.　旧制高等学校入試と受験生

(1)　受験生と学校選択

明治後期の旧制高等学校において学校間格差が存在するということは，当然のことながらその学校を受験する受験生の学校選択に影響を及ぼすことになる。ここでは受験雑誌の記事などをもとに受験生の高等学校選択に対する意識の実態を見ていくことにする。

当時の受験生によく読まれていたと考えられる雑誌に『中学世界』というものがある。この雑誌は1898（明治31）年に当時遊学案内書を発行していた東京博文社から発行されていたものであるが，明治30年代後半からその中に占める受験関係の記事の割合が次第に増加していく。そして，1906（明治39）年より年3回の増刊号の1つは受験関係のものとなるに至った。明治30年代後半以降の『中学世界』における受験関係記事は表1のとおりである。受験関係の記事は以下の二つに大別できる。一つは，1907（明治40）年より毎年見られる入学試験の総括をする記事のような入学試験一般に関する編集部が

表1 『中学世界』における受験関係記事

巻	号	発行年月	著　者	記　事
9	4	1906.3		入学試験の今昔
	7	6	不知火	一高受験者心得
	10	8	某係官	一高入学試験雑話
10	3	1907.3	八鉄子	一高受験案内
	7	5	XYZ	高等学校入学試験受験日記
	8	6	鳥渓生	東京中学と地方の中学
	10	8	一受験生	一高受験の四日間
	12（増）	9	安部磯雄	学生と受験
				最近受験界の趨勢
			SN	高等学校受験案内
			一受験者	受験四日間
			P. P. P.	受験学生の巣窟
11	3	1908.3	紫雨	高等学校受験準備の一年
	8（増）	6		高等学校
				高等予備校
	12（増）	9		当年の受験界
			大北生	向陵突喊記
			翠瀛生	一高受験記
12	4	1909.3	一老兵	誰れか一高の堅塁を抜く乎
				三高受験案内
			平凡生	僕の受験経験談
				四高事情
	12（増）	9		当年の競争受験界
13	4（増）	1910.3		各高等予備校の内容
	12（増）	9		当年の競争受験界

執筆した記事であり，もう一つは受験経験者が寄稿した体験記である。ところで，このような体験記の中身を見ると圧倒的に一高関係の記事が多いことがわかる。このような記事が多いということは何を意味するのかといえば，多くの読者，すなわち高等学校を受験する学生たちが一高の受験体験記を求めていたということである。あるいは，一高に受かるくらいの者でなければ体験記は書けないと考えることもできるが，どちらにしても一高優位という体制であることにかわりはない。一高以外の高等学校を第一志望にしていた学生はもちろんいたにせよ，基本的に受験生の学校選択は，一高を軸に動いていたということができる。では，具体的にどのようなことが言われていたのだろうか。

学校選択に関するアドバイスは一高の受験体験記には少なく，もう少し一般的な記事に多い。なぜなら一高の受験体験記は往々にして一高が第一志望であることを前提とした上で，入学試験のまさに実体験を記述したものが多いからである。まずは，一高を第一志望校としてすすめるものについて検討する。ある受験者は一高に入るための入学試験の得点について「勿論自分のベストを盡して答案を作らば其以上は何點とならうが知ったことには無之候へども，今假に念の爲此事を調べ見るも滿更無益なことには有之まじく候。文部省の統計と云ふを見るに，今總點を百點と假定して換算すれば，八十點以上の得點者全國に十一名あり内九名は一高なり，一高に最も多きは六十點以上七十點までの得點者にして，全國を通じて最も多きは五十點以上六十點までの得點者なり，四十點以下の得點者は僅かに四高，五高，六高，七高に少數を見出すのみ。之に依て見るも一高に入学の御志望なる以上は是非とも七十點以上を得るの御決心を要し候」[9]と言っている。80点以上の受験者が9人いた年は現段階では分からないが，この数値が正しいのならば1905（明治38）年度入試のものであろう[10]。そして，その翌年に『中学世界』に掲載された記事では，学校選択についてもう少し詳しいアドバイスが見られる。

> 無論，第一志望は東京でなければならぬ。さて，第二志望は何處にするか。三高乎，二高乎，それとも四高乎。但しは六高乎。此の點は各自の鄕里との關係もあるだらうし，又，他に事情も種々あって，他

人の斷定を待つ事は出來ないが，今姑らくこれ等の條件から全く離れた處で，學生一般の傾向を調査して見ると，矢張，三高が第一位，次に二高，五高と云ふ順序である。そして，七高などに至ると，志望者が最も少ない。少し覇氣のある青年達に云はせると，『七高何かに這入るのは恥辱である。』だの，『三高，二高一四高でも外れたら，綺麗に諦めて，來年更に試驗を受け直すばかり。』だのと，公言して居るが，而も多くの學生はこれに一致して居るらしい。鹿兒島への流刑はよくよく厭であると見える。

それで斯う云ふのが學生一般の意向である以上，（尤も，中には何處でもない，鹿兒島だらうが，八丈ヶ島だらうが，高等學校にさへ入學出來れば，それで我が事了るのである，などの消極派もないではないが）勢い，地方の學校に，比較的成績の劣等なのが廻はる事となるのは止むを得ない[11]。

この記事における高等学校の序列は，基本的に成績面での高等学校の序列と同じである。これは試驗の結果と受驗生の意識のどちらが原因ということでもなく，双方が刺激しあうことで拡大再生産されたものであるといえよう。しかし，この記事の筆者は必ずしもこの状況を支持していたわけではない。彼は一高のこのような志願者殺到の状況を論じて，「余輩は寧ろ，學問に都鄙の區別なしと云い，都會の地，必ずしも良教師を養はぬと云い，學問するには地方こそ却って理想的だなどゝと云って，功名に熱し，文明生活の美酒に飢え，一にも二にも東京々々と，首都崇拝の絶頂に達せる青年學生を一時的に誤魔化し去らうとするやうな傾向のあるのを見て，その拙劣なる策畧に驚き，兼ねて識者の淺慮を憫笑するものである」[12] と言っている。これ以外にも一高人気を批判的に見る記事もあった。某係官と称する人の『中学世界』に掲載された談話によれば，一高は入学試験が難しいから優秀な学生が多いと考えるのは早計であって，単に志願者が殺到するから難しくなってしまうのであるという[13]。さらに激しい一高志願者殺到への批判もある。

『近きに附け』此一語で充分だ。念のため，言ふならば，即ち仙臺の人は二高を受けよ，鹿兒島の人は七高を受けよ，と言ふ事である。
（中略）
地方の人が態々東京へ出て一高を受けやうとするのは，大半つまらぬ動機からだ。折角地方の中學を優等で卒業しても，地方の高等學校へ入ったのぢあ詰らないとか，一高に入ったと云ふと，他人に浦山しがられるだらうとか，最少し氣が利いた所で，大學に入ってからも一高出身の者は成績が宜いさうだからなどと，自分も一高に行けば，地方の中學に居た時と同様優等でも採る積である[14]。

この筆者が言うことはある意味で事実なのだろう。しかし，東京の一高を受けようとする地方出身者を一概に問題視することはできない。東京は当時の日本において文字通り大都会であったわけだし，また東京と京都の帝国大学を比較すれば，東京の方が充実しているといえる[15]。さらに成績優秀者の進学先から推測するに，一高は隣接する東京帝国大学に多くの学生を送り込んでいたと考えることができるのである[16]。また，医科大学に進学することになる第三部では卒業生の何割かが東京帝国大学へ進学し，そのあとの何割かが京都帝国大学，そして残りが福岡医科大学というふうになっていたようである[17]。これらの事実を勘案すれば，成績優秀者が多いと考えられていた一高に志望者が集まることは必然性があったと考えられないこともない。

(2) 上京遊学と学習方法

明治後期の受験生にとって，一高は東京に対する憧憬と相俟って非常に大きな存在であったといえる。しかし，受験生における東京への憧憬は一高志望という形であらわれるだけではない。当時は中学校を卒業して高等学校の入学試験まで3ヶ月程度あるわけだから，それまでの間の受験に向けての準備方法においてもやはり東京という都市の存在が大きな問題となった。次章でも検討するように，東京に出て勉強をするのは決して意識の問題に限ったことではなく，教育機関の充実度などといった物理的な問題もあることは事実だが，ここでは受験生側の意識という点を中心に検討することにする。

当時は，東京へ出てくるということだけでも一苦労であった。1902（明治35）年の『東京遊学案内』には地方から東京までの，そして東京市内の電車の路線の案内が掲載されているほどである[18]。よって，必ずしも上京をすすめる意見ばかりがあったわけではなかった。一高受験者のためにかかれた記事においても，「何々速成科とか何々豫備校とか様々の射利的學校も有之候へども，之は出ねばならぬと申す程大切なものにても有るまじく，寧ろ家にいて静かに勉強致し候方或は得策かと存候」[19] とあり，必ずしも上京をすすめてはいない。さらに前節でもあげた某係官も，東京には図書館もあり学者も多く

研学の便宜も多いとはいうものの，その他の誘惑も多いので地方で準備をしたほうが安全かもしれないといっている[20]。さらに七高や八高で繰り上げ入試の行われていた時期にはもっと実質的な意味での問題もあった。繰り上げ入試は6月上旬頃に行われるので，6月末まで授業を行う予備校に通っているだけでは学習が追いつかないのである。また，その他の学校を受ける場合でも結局自学自習が必要で，学校へ行く気がなくなるので自宅で準備したほうがよいというのである[21]。

しかし，東京で学習をすすめることについて賛意を示す意見も当然あった。以下に示すのは，東京の中学校と地方の中学校を比較した記事の一部である。

> ○東京の中學には，大抵補習科がある。地方にもないことはないが，あった處で生徒は少ない，東京の中學補習科は，皆滿員である。つまり地方の中學卒業生は卒業後直に實業につくか，或は高等の學校に進まうとして東京其他の專門學校所在地へ出かけて，入學準備をするから，補習科の必要はないのだ，處が徴兵猶豫の問題がやかましくなったから，今年から各府縣立中學にも余程補習科が出來たやうだ。
> ○だから東京の中學補習科には，其中學の卒業生ばかりでなく，地方中學の出身者も多く入學して居る。中には專門學校へ入學しやうとして，見事失敗して，逆戻りして居る者も多い，又徴兵猶豫のために入學し居るものも多い。東京の中學補習科は落ち武者の集合所たる觀がある。
> ○東京中學は語學が割合進んで居るやうだ。他の學科は大差ない。これは東京には中學以外に英語研究所も澤山あるし，圖書館もあるから，學校で難解の所は，いつでも教はることが出來るからであらう[22]。

この記事そのものは特に上京遊学をすすめるものではないが，地方の学生が上京して補習科などに入学している実態を如実に示しているし，受験科目の中で最大のネックとなっていた外国語の学習環境という点において東京が優位であることも示している。上京遊学をすすめるものはさらにある。前節で一高を第一志望とすべきだという見解を示したものとして紹介した筆者は，早くより上京している方が，どちらかといえば利益が多いと言っている[23]。その理由としては，上京を早くすることによる利益としては，東京にはさまざまな学校の受験科があること，優秀な教師が多いこと，受験専門家といえるほど経験をつんだ学生が沢山居ること，地理に明るくなることをあげている[24]。

1906（明治39）年に京都帝国大学自彊会の同人が『学界之先縦　青年修学指針』という本を出版した。すでに大学に入った学生が後輩に対して中学生活から大学入学までのさまざまな心得について書いた本なのであるが，その中で当然ながら高等学校入試についても触れている。この本では高等学校入試に向けての学習のあり方としては，中学校での真面目な学習が大切だとして，特に四，五年での学習をしっかりやるようアドバイスしている[25]。これだけでは自宅準備をすすめていると考えられなくもないが，この本全体としては上京遊学を推奨している。その理由としては，外界に刺激され奮発すること，教育機関が豊富であること，他の学校で他の教師に触れることに意義があるということをあげている。しかし，長所ばかりでないことも認識しており，心を多岐に迷わせること，習慣の変化から勉強に集中できず，悪風に感染する危険があるということを上京の短所としてあげている[26]。

入学試験に向けての学習方法はさまざまである。しかし，受験雑誌などにあらわれた意見としては，上京して何らかの教育機関に入った方がよいというものが多く，また実際にそうしている学生が多いという状況を示している。上京遊学をすすめる理由も多岐にわたっているが，東京は都会であること，そしてそれにより受験対策の教育機関が多いことがあげられている。では，その受験準備教育機関としての予備校はどのような状況にあったのか，次章ではその点を検討する。

2. 旧制高等学校入試と予備校の動向

(1) 予備校の動向

総合選抜制期において，東京を中心に多くの予備校が設立されるに至った。これらの予備校はいかにして設立されたのか，またどのような予備校があったのかを見た上で，これらの予備校の動向を検討する。

この頃の主要な予備校の設立状況は表2に示してあるとおりである。これからも分かるように，たしかにこの時期に予備校はその数を増やすことになる。1902（明治35）年に高等学校を受験した安倍能成によれば，「東京の様子はよく知らなかったが，齋藤秀三郎氏の正則英語学校などは，受験科目中最も重要な英語の受験準備学校として，東京の中学卒業生，近県の中学卒業生は，大抵通って居たようである。後になる程受験準備学校の組織が完備して来て，英語の外に国語，数学，物理，化学等と，試験科目の総てが網羅されるようになったらし

表 2　明治 30 年代から 40 年代にかけての主な予備校の設立状況

1888（明治 21）	国民英学会設立
1896（明治 29）	正則英語学校設立
1897（明治 30）	研数学館，数学専門の塾として開校
1900（明治 33）	官立学校予備校設立（東京物理学校内）
1902（明治 35）	正則英語学校，正則予備学校を設立 普通学講習会設立
1903（明治 36）	開成予備学校設立（開成中学校内） 早稲田高等予備校設立（早稲田中学校内）
1904（明治 37）	京都予備校設立
1905（明治 38）	中央高等予備校設立（中央大学内）
1906（明治 39）	高等予備校設立（専修大学内） 日本高等予備校設立（日本大学内） 国民英学会，別科の中に数理化受験科設立
1907（明治 40）	明治高等予備校設立（明治大学内）
1908（明治 41）	東洋高等予備校設立（東洋大学内）
1910（明治 43）	東京高等予備校設立（法政大学内）

関口義「各種学校の歴史⑥―明治後期における各種学校(4)―」及び竹内洋『立志・苦学・出世』，p. 30 をもとに作成

い」[27]。とはいうものの最初から順調に数を伸ばしていったわけではない。1901（明治 34）年には小学校や高等女学校に準ずる予備学校を含めてその衰退が見られたと報じられている[28]。その予備校に対する評価だが，それは決してよいものばかりではなかった。

> ◎こういふ風に入學試驗が六ヶ敷くなって，學生が困って居るから，受驗法だとか，受驗問答だとか，答案のかきかたゞとかいふやうなものも澤山出來，受驗者のために設けられた，受驗豫備校ともいふべきものも澤山出來た。
> ◎これらは受驗者のためには便利ではあるが，著作者や學校も亦儲けているから，一擧兩得といひたいが，中には月謝を目宛てに立てた，不親切な學校もあるから。學生諸君も，父兄諸君も，大に注意しないと，馬鹿な目に遇ふことがある。注意したまへ[29]。
>
> 錦町では正則豫備校，正則英語學校，國民英學會，中央大學の高等受驗科，錦城中學の高等豫科。猿樂町邊では，数理學館，研数學館，大成學館内の受驗科。其他，駿河臺に明治大學の高等豫備科もある。連雀町に開成の高等豫科もある。此等の諸學校が，雲の如き受驗學生の爲めに，或は「徴兵猶豫」の特典あることを吹聽し，或は教員の缺席なきを特色とし，或は山的問題の特別傳授を楯とし，極度迄門戸を開放して，多大の便宜を與へて居るのである[30]。

後者は「山的問題の特別傳授」という側面も認識していることからして，決して手放しで評価をしているとは言い難い。しかし，多くの学生は何らかの形で予備校に通っていたわけだし，前章で見たように地方から上京した学生の目的もこの予備校などの受験準備教育機関への入学が目的だったと考えられる。では，当時の予備校の実態はいったいどのようなものであったのか。

当時最も多くの学生を集めていたと考えられる学校に正則英語学校，正則予備学校がある。正則英語学校は 1897（明治 29）年にすでに出来ているが，正則予備学校はその姉妹校として 1902（明治 35）年 10 月に出来た。正則予備学校では英語以外の受験科目を教授していた。1906（明治 39）年ごろには正則英語学校は 5,000 から 6,000 人の学生を収容しており，正則予備学校は 2,000 人あまりの学生を収容していたという。しかも，正則予備学校の進学実績については，「三十五年以來の，高等學校，專門學校入學志願者で，此學校の門をくゞらぬものは少ない」ということであり，実績もよかったことがうかがえる[31]。とある浪人経験者の体験談でも浪人中は私立大学に籍を置きつつ正則英語学校に通い，翌年 4 月からは正則予備学校の臨時受験科に通ったということが語られている[32]。正則英語学校の校長斎藤秀三郎の授業は，千人もはいれそうな三階の大講堂に十人掛位の大机，そこに一杯の学生，席の得られぬ者は立つものもあり，教壇の隅に坐るもあり，満場立錐の地もない人いきれの室で行われていたという回顧もある[33]。

また，1908（明治 41）年の『中学世界』において予備校に関する質問をしたと思われる投稿者に対する回答として，「官立學校入學準備の爲めには早稲田高等豫備校，正則豫備學校，正則英語學校，國民英學會（數理化受驗科の併置ありて英語諸科と連絡あり）を始め其他幾つも此種の學校にて稍々適切のもの」[34] があると答えている。このような予備校に関する質問は時折あるようで，夏期講習会に関する質問に対する回答としては，国民英学会，正則予備英語学校，研数学館，数理学校などその他各種の学校で夏期講習会が行われており，数学と英語だけを短期に講習するには大成学館がよいと答えている[35]。当時は 7 月に入試が行われていたことからして，受験から最も遠いこの時期は受験生の一番気が抜ける時期でもある。しかし，そのような中で夏期講習会に関す

表3　予備校の利用状況

	東京中学出身者			地方中学出身者			
	第一回目	第二回目	第三回目	第一回目	第二回目	第三回目	第四回目
自宅準備	6	2		1			
正則		1		3	2		
正則国民	2						
研数学館	1						
母校の補習科	1						
早稲田（の補習科）		1		1	3	1	
開成（の補習科）		1			1		
中央大学					1	2	
明治大学					1		
始めは中央後に早稲田						1	
不明			1		1		1

一老兵「誰れか一高の堅塁を抜く乎」『中学世界』第12巻第4号，p.134より

る質問があるということは予備校に対する関心の高さの一端を見てとることができる。

ところで，1909（明治42）年の『中学世界』の記事の中に何人かの受験生に準備方法を聞いた結果が掲載されている。この記事は前章で紹介した一高への受験者の殺到を批判している記事であり，この記事の筆者は自宅学習が効果的であると考えている上に，母数も少ないという難点があるが，当時の受験生の学習の実態を垣間見せる貴重な調査である。その結果は表3のとおりである。自宅学習に関してはたしかに現役合格（第一回目）の受験生に多いが，浪人をすればやはり何らかの形で予備校に通うことがうかがえる。しかし，このような予備校に対して痛烈な批判も存在していた。以下に示す記事は，これまで言及した記事の中では評判のよい予備校として論じられていた正則英語学校，正則予備学校に通った経験のある学生からの投稿である。

> 僕は受驗用として，正則英語學校の樣なやり方は不賛成だ。現に同校の校長齋藤秀三郎氏も，僕等に對して，君等は二ヶ月や三ヶ月位英語を勉強しても物にはならないから，今年は先づ入學試驗に落第して，九月から又來年まで勉強し給へ。』と謂はれた事がある。成程文法といへば，唯或一局部に限り譯読と謂へば難句集――而かも二種類までも――のような乾燥無味な者を讀むで居るのである。これで入學試驗がうかると思へば大間違である。勿論英語を二三ヶ月の速成で物にしようと思ふ考が，既に誤って居るのであるが，それにしても，諸君は寧ろ國民英語會的に近世流儀の散文を読むとか書取聴取の練習をする方が，英語の學力を進歩せしむる事が出來ないまでも，學力を退歩せしむる虞がない[36]。

正則英語学校や国民英学会といった英語学校は，明治30年代に入り受験生が多く通うようになるにつれて，少なくともその教育課程に関しては受験を意識した形に変化させていっている[37]。しかしこの批判から察するに，正則英語学校は多くの受験生が通っていたとはいえ決して教育内容においては受験を意識したものではなかったことが分かる。本格的な英語学習を売りにして，「先づ入學試驗に落第して，九月から又來年まで勉強し給へ」と浪人をすすめる発言を校長自らがしている正則英語学校はいうまでもないが，比較対象としてよい評価を受けている国民英学会にしても，「近世流儀の散文を読む」という授業が英文解釈としては短文の和訳のみが出題されていた当時の入試においてどれほど有効だったのかは疑問が残る。さらにこの筆者による正則批判は続き，午前正則予備学校，午後正則英語学校と通ったが，体力の消耗が激しく効果がなく途中で退学したと言っている[38]。ちなみにこの筆者がすすめる学校として，「開成中學校の補習科と早稲田の高等豫備科であって，之れまでに於ける兩校の入學者は，可成見事な成績を示して居る。殊に都合の好い事には，兩校共に午後である」[39]とのことである。

これまで見てきたのは受験生の側から見た予備校の状況であったが，予備校を設立する側から見て予備校の運営にはどのようなメリットがあったのだろうか。表4は主要な予備校の設立願や学校案内書のデータに見られる各予備校の授業料の一覧である。これらの予備校はその

表 4　主要な予備校の授業料

学校名	年度	学科	年限	定員	束脩	月謝	全授業料
国民英学会	明治 37 年	普通科	1年		1	1	
		受験科	3ヶ月		1	1	
		正科	6ヶ月		1	1	
		英文学科	1年		1	1.2	
		会話専修科	6ヶ月		1	0.8	
正則英語学校	明治 37 年	予科	6ヶ月		1	0.75	
		普通科	1年6ヶ月		1	1	
		普通受験科	1年		1	1	
		高等受験科	1年		1	1.2	
		文学科	3年		1	1.5	
		予科（夜間）			0.5	0.75	
		普通科（夜間）			0.5	1	
		高等科	3年		0.5	1.2	
中央高等予備校	明治 38 年		10ヶ月	170	2	1.5	
高等予備校	明治 39 年		10ヶ月	140	1	1.5	
日本高等予備校	明治 39 年					3	
明治高等予備校	明治 40 年		1年3ヶ月	500	0	2.5	
東京高等予備校	明治 43 年			300	1	2.5	
正則予備学校	明治 36 年	高等受験科	1年		1	1.2	
		数理化学受験科	1学期		1	1.2	
		数理化学初等受験科	1学期		1	1.2	
		普通受験科	1年		1	1.2	
		普通科	1学期		1	1.2	
		国語漢文科	1年		0.5	1	
		数学高等科	1年		0.5	1	
		数学普通科	1学期		0.5	1	
		数学初等科	1学期		0.5	1	
		理化学科	1学期		0.5	1	
開成予備学校	明治 36 年	高等受験科	10ヶ月	100	1	2	
		中学速成科	3年	200	1	1.5	
		中学予備科	1年	50	0.5	0.75	
		中学英語科	5年	150	0.5	0.75	
		中学数学科	5年	150	0.5	0.75	
早稲田高等予備校	明治 36 年			150	1	2	
（参考）私立大学予科の授業料							
東京法学院大学	明治 37 年	予科			2		26
法政大学	明治 37 年	大学予科	1年6ヶ月		2	2	
早稲田大学	明治 37 年	高等予科	1年6ヶ月		2		37.5

束脩・月謝・全授業料の単位はすべて円。
国民英学会・正則英語学校・私立大学予科の各校：『官公私立諸学校　改訂就学案内』より
高等予備校：『専修大学百年史』，p. 846 より
日本高等予備校：『日本大学九十年史　上』（日本大学，1982），p. 334 より
東京高等予備校：『法政大学百年史』，pp. 184-185 より
正則予備学校：『中学世界』第 6 巻第 1 号，p. 197 より
上記以外：設置願（東京都公文書館所蔵）より

ほとんどが半日の開講であったにもかかわらず，全日制の私立大学の予科とほぼ同じくらいの授業料を徴収しており，もし定員通りあるいはそれ以上の学生を集めることができれば高収入が期待できる教育機関であることが分かる。実際に国民英学会や正則英語学校などは定員を定めていないため相当多くの生徒が集まっていたのであろう。そうであれば，新しく予備校として教育機関を立ち上げるということも，英語学校が教育内容にまでは手を加えないまでも受験用の教育課程の設置を進めていくということも理解される。

(2) 私立大学・中学校と予備校

総合選抜制期前後に設立された予備校の中には私立大学や中学校が設立した予備校が存在している。これらの学校は学校制度の中で一定の位置を占めている学校であり，この種の学校が予備校を設立するということはある種の矛盾を抱えることになる[40]。では，これらの学校はいかなる事情のもとに予備校を設立することになったのか，そして母体となる学校に対してその予備校がどのような位置付けのものとして存在していたのか，まずは私立大学の設立した予備校を，次いで中学校が設立した予備校について検討する。

私立大学が予備校を設置するに至った理由としては，前節で示した収入面におけるメリットという点と1903（明治36）年の専門学校令との関係による点との2つが考えられる[41]。専門学校令によって大学という呼称を求める私立の専門学校は予科を設置せざるを得なくなったのである。しかし，実際に予科を運営するにはさまざまな問題があった。教室や教員の確保といった問題，そして何よりも大切なのは学生の確保であった。そこで考え出されたのが，予科と同時に予備校を経営することだったと考えられる。ここでは明治大学が設置した明治高等予備校をもとにこの点を検討する。明治高等予備校は1907（明治40）年に明治大学に付設されたものだが，明治大学ではこれに先駆けて1903（明治36）年に高等予科が設置されていた。この高等予科の設置は明治専門学校が専門学校令によって明治大学になる前のことである。この高等予科はもちろん明治大学への入学のために設置されたものであったが，1903（明治36）年度の高等予科の学生原簿を分析すると，在籍者737名のうち卒業したものは109名であり，その他の者はさまざまな理由でやめていったようである[42]。このような実態をふまえると，高等予科は大学本科などへの予備教育機関であったと同時に，他校を含めた高等教育機関への予備教育機関であったといえるのであり，実際に高等予科の広告に「他大学高等学校諸官立学校等に入るのに便宜あり」という表現があったり，その他の資料にもこのような趣旨の表現が見られたりすることからも理解できる[43]。高等予科がこのような状態だったことからして，いわば高等予科の進学準備教育部分を拡大，整備した形で高等予備校の設置に至ったと考えることは決して困難ではない。この明治高等予備校の実態を見る手がかりとして，以下に設立時（1907（明治40）年）の教室割と1912（明治45，大正元）年の高等予科と高等予備校の設置科目と担当教員をあげておく。

1907（明治40）年明治大学高等予科・明治高等予備校教室使用状況（数字は教室番号）[44]

高等予科
　午前8時～午後2時　1，3，4
　午後2時～午後4時　2，5
高等予備校
　午前8時～午後2時　2，5，6
　午後2時～午後4時　1，3，4，10，11

1912（明治45，大正元）年明治大学高等予科・明治高等予備校教員（斜体は兼任の者）[45]

	高等予科	高等予備校
倫理	吉田静致	
国語	*内海弘蔵*	*内海弘蔵*， 森　治蔵
漢文	*平井　参*， *笹川種郎（兼東洋史）*	*平井　参*， *笹川種郎*， 川合
英語	*佐久間信恭*， *森　巻吉*， *畔柳都太郎*， *岡田実麿*， *高須祿郎*， *山崎寿春*， *高野礼太郎*， *山口鎌太*， *佐川春水*， *渡辺半治郎*， ウイード， サンマース	*佐久間信恭*， *森　巻吉*， *畔柳都太郎*， *岡田実麿*， *高須祿郎*， *山崎寿春*， *高野礼太郎*， *山口鎌太*， *佐川春水*， *渡辺半治郎*， 村井知至， 村田祐治
独語	松坂善吉	
応用数学，	中村茂男	

商業通論		
数学		遠藤又蔵, 松村定次郎
西洋史	*斎藤阿具*	
歴史		*斎藤阿具*
論理心理	紀平正美	
法学通論	石井宗吉	
簿記, 商業作文	岡田市治	
地理	中沢澄男	
応用物理学	須蔵伝次郎	
物理		須藤伝次郎
応用化学	*菅沼市蔵*	
化学		*菅沼市蔵*
応用博物学	伊篤太郎	
書法	稲春	

この教室割から考えるに予備校のほうが利用教室数が多いことになる。このことからしても私立大学が設置した予備校が多くの生徒を集めたことがうかがえる。また，教員も予科との兼任者が多い。明治大学の場合は高等予科の設置が予備校よりだいぶ早かったので特に問題ではないが，このような兼任の実態からも他の私立大学における高等予科との並行運営もより現実味を帯びてくる。また，これらの学校では第一高等学校など官立学校の教員も教鞭を執った。以下に示すのは 1914（大正 3）年に一時閉校になっていたが再興されるにいたった日本高等予備校（日本大学内）の教員一覧である。これを見れば官立学校はもちろんのこと他の予備校などの兼任の者が多いことが見てとれる。

1914（大正 3）年日本高等予備学校教員[46]

英語　森　巻吉（一高教授），村田祐吉（一高教授），上条辰蔵（東京高師教授），飯塚陽平（学習院教授），鈴木芳松（正則英語講師），岡田実麿（一高教授），岡本忠之丞（一高教授），山口鋸太（東京高商教授），山口　巌（学習院教授），佐川春水（日進英語学校長），石原益治（正則英語講師）

数学　松村定次郎（正則英語講師），渡辺孫一郎（一高教授），根津千浩（正則英語講師），梶島二郎（工業大学教授）

国語　青木　正（一高教授），杉　敏介（一高教授）

漢文　島田均一（一高教授）

日本・東洋史　前内　亘（一高教授）

西洋史　今井登志喜（一高教授）

物理化学　山川弘毅（一高教授）

化学　近藤清次郎

次に中学校の設立した予備校について検討するが，中学校における受験準備教育は，1899（明治 32）年の中学校令により設置が認められた補習科からはじまるということができる。補習科は本来 9 月入学の高等学校との接続関係のために設置されたものであり，その意味では本質的に受験準備という側面を持っていたといえる。東京における中学補習科の実態は，前章で紹介したように東京に限らず地方の学生をも収容した。また，徴兵猶予の特典を受けるものが多いということもあり，徴兵猶予のいわば隠れ蓑的な存在として機能していた。実際に「受験準備中徴兵猶豫を要するものは，中學の補習科へ入るが最もよい」[47] というアドバイスも見られる。徴兵猶予との関係ということであれば，その関係で地方の中学校にも補習科が設置されるようになったという指摘もあったが，上京遊学をせずに地元で学習をすすめたいという学生も存在しただろうし，文部省は東京への流入者を減らすために補習科の設置，整備を進めたという指摘もある[48]。表 5 は 1903（明治 36）年以降の中学校の補習科の実態を示している。学校数においてはそれほど東京が突出している感はないが，生徒数についていえば圧倒的に東京が優位であるといわねばならない。

このような流れから，中学校に予備校が併設される場合があった。1903（明治 36）年に開成予備学校と早稲田高等予備校ができ，1905（明治 38）年に錦城予備学校ができた。早稲田高等予備校は早稲田大学も関係しているが，早稲田中学校を校舎とし，早稲田中学校の教師も指導にあたったことからして中学校系の予備校と考えてよいだろうと思われる。今ここにあげたのはすべて東京の学校であるが，地方の中学校の補習科の実態から考えるに補習科から予備校に発展することはないだろうと思われる。

私立東京開成中学校は 1901（明治 34）年東京府の管理を離れて私立の中学校となるが，その際すでに「受験に必要なる學科を補修せしむ」1 年間の補習科が設置されていた[49]。その後，1902（明治 35）年に受験準備教育機関としてやはり午後 3 時から 7 時までの 1 年間（実際は 9 月から 6 月までの 10 ヶ月）の夜学を開設し，定員を 100 名とした[50]。そして，先述のように 1903（明治 36）年の開成予備学校開設にいたる。補習科，夜学の廃

表5　中学校の補習科の設置状況

年　度	全　国		うち東京	
	校数	生徒数	校数	生徒数
1903（明治36）	20	473	4	241
1904（明治37）	67	986	5	318
1905（明治38）	35	508	7	343
1906（明治39）	41	315	5	272
1907（明治40）	44	594	8	373
1908（明治41）	45	269	6	215
1909（明治42）	40	288	7	147
1910（明治43）	38	408	4	150
1911（明治44）	37	419	3	118
1912（明治45）	18	306	1	34

『全国中学校ニ関スル調査』明治37年-大正元年より
1905（明治38）年：京華中学校（東京）に補習科は存在するも生徒数が不明だが，学校数には数え上げてある。

止された時期やこれら3つの学校の関係は不明であるが，開成予備学校の高等受験科は定員100名，年限は10ヶ月，授業時間が午後1時半から5時半ということで，定員，年限，授業時間とも夜学と一致していることからして，夜学の存在は少なくとも開成予備学校に一定の影響を及ぼしたとはいえるだろう[51]。

このような中学校が設置した予備校は中学校内にある関係で，授業はすべて午後となっている。具体的にいえば，早稲田高等予備校は午後1時半から6時半までである。そのため授業時間数も若干少なめになっているが，前節でも紹介した記事の中でも開成や早稲田を評価する声もあったことから考えれば，十分評価に値するだけの実績をあげていたと考えることができる。

おわりに

明治後期において，旧制高等学校入試は1902（明治35）年から1907（明治40）年にかけての総合選抜制をはじめさまざまな入試改革が行われたが，受験生の動向についていえばそれほど大きな影響があったとはいえない。たしかに学校間格差を助長するような風潮もあったし，その意味では影響を受け，また実際の学校間格差に影響を与えていくことにもなったのだろうが，そもそも受験生における東京願望，ひいては一高願望というものは総合選抜制によって引きおこされたものではない。その意味では受験生には入試制度改革による影響があったとはいえないのだが，はたしてなぜそうなのであろうか。その原因はさまざまなものがあるのだろうが，一つには当時の旧制高等学校がもつステータスというものが多分に影響していると考えられる。旧制高等学校の卒業生はほぼ無条件で帝国大学へ進学し，ゆくゆくはエリートとなるわけである。そのような状況に置かれている受験生にとって入試制度改革があったところでそれは瑣末な問題にすぎない。どんな方法のもとでも旧制高等学校に入学して，エリートの路線に乗ることこそが至上命題なのであり，その意味で入学試験の方法が受験勉強のあり方に大きな影響を与えることはないと考えられる。この点は後の時代における入試改革と受験生の学習形態の変化とは大きく異なる点として考える必要があるだろう。また，入学試験の内容の違いという点についても注目しておく必要がある。当時の入学試験はすべて記述式であるが，その内容はもっぱら記憶力に依存する問題であったことも事実であり，その意味でも試験方法によらずひたすら暗記に努めることが必要であったとも推測される。この点については今後さらなる研究を進めていきたい。

一方，中学校卒業者の増加と学校制度の整備によって，予備校はそれまでの中学校と高等学校の橋渡しを果たす教育機関から1年間にわたって浪人生の教育や3月に中学校を卒業した受験生の学習の援助をうけおう教育機関へと変化した。そこには予備校経営がもつ財政的なメリットなど経営者側の問題もあっただろうが，まだこの時期には東京の方が語学教育などにおいては充実度が格段に上であったという事情も絡んでいたわけである。さらに受験生の一高，ひいては東京への憧憬もあるのだから，いきおい受験生は東京に集まってくる。そのような中で多くの学生を集めて経営的にも問題なくやっていける土地があるとすれば，当時は東京をおいてほかに存在しなかったと見ることができる。しかし，これだけではこの頃の予備校の増加は入学試験制度との有機的な関係があるとはいえないが，総合選抜制期における一高志望者の増加を考えると，より確実に一高へ入学するためにはより多くの学習を要するということになり，それゆえに受験勉強を援助する予備校が増加するという考え方も可能である。その意味で予備校の増加と入学試験制度改革には関係があるということになるが，総合選抜制の実施により多くの学習が必要になったかどうかということの検討なしにこれを証明することは不可能である。ここでは仮説的見解として述べておくにとどめたい。

また，予備校での教育内容も注目されてしかるべきである。本論で見たように，当時の予備校が単なる試験対策の学校とはいえないからである。予備校の教育内容に

ついては多くの受験生を迎え入れるようになった現在においてなお必ずしも受験準備に即した内容といえるかどうかは疑問の部分があるし，入学試験は基本的にそれまで学習してきた内容について考査するのだから，そもそも入学試験の準備教育といった特別なものが存在するとは言いがたい。そうであるならば予備校とはいったいどのような学校なのだろうか。今後の研究とつなげていくことで予備校という教育機関の全体像，そしてその可能性を明らかにしていきたい。この点についても入試問題の内容の分析が必要であるといえる。それにより，入試のための準備教育を施す予備校の位置付けがさらに明確になるであろうし，旧制高等学校に入学する学生に求められていたいわゆる教養についてや度々問題となっていた学力面での中学校との接続関係についても明らかになるであろう。

【註】

1 当時の帝国議会では何度も高等学校増設案があがっていたし，さまざまな県で高等学校を誘致する運動もあった。

2 たとえば帝国教育会では 8 年制の中学校に 3 ないし 4 年制の大学という制度が構想され，学制改革同志会では高等学校は大学予備門とすることが構想された。

3 たとえば「山田邦彦氏の高等学校入学試験談」『教育時論』600 号 (1901.12) pp. 48-49

4 文部省専門学務局『明治三十八年度高等学校大学予科入学者選抜試験報告』(1906), p. 1

5 厳密には 1909（明治 42）年と 1910（明治 43）年入試は第七高等学校造士館を除く学校で共通試験による入試を行った。

6 総合選抜制期を中心とする明治後期の旧制高等学校入試については，拙論『明治 35 年から 40 年の旧制高等学校入試における全国総合選抜制度に関する考察』（修士論文，慶應義塾大学，2000，未刊）を参照されたい。

7 拙稿「近代日本における予備校の歴史」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第 48 号 (1999.3)

8 ①英語学校が予備校化したもの，②私立大学（専門学校）が設置した予備校，③中学校が設置した予備校，④受験準備教育機関が設立したもの。この時期の予備校の類別法については，前掲の拙稿及び関口義「各種学校の研究⑥—明治後期における各種学校 (4)—」『各種学校教育』第 7 号 (1965) を参照。

9 不知火「一高受験者心得」『中学世界』第 9 巻第 7 号 (1906.6), pp. 128-129

10 1902（明治 35）年の 80 点以上の者は 8 名，1903（明治 36）年，1904（明治 37）年はそれぞれ 2 名である。

11 SN「高等学校受験案内」『中学世界』第 10 巻第 12 号 (1907.9), p. 50

12 同前，p. 61

13 某係官談「一高入学試験雑話」『中学世界』第 9 巻第 10 号 (1906.8), p. 126

14 一老兵「誰れか一高の堅塁を抜く乎」『中学世界』第 12 巻第 4 号 (1909.3), p. 124

15 当時の東京，京都の両帝国大学の比較については潮木守一『京都帝国大学の挑戦』（名古屋大学出版会，1984）第 5 章・第 6 章を参照されたい。たとえば，京都帝国大学法科大学では文官高等試験等で多くの合格者を輩出できないといった事情を抱え，1907（明治 40）年に東京帝国大学法科大学に追随する形で，3 年制を 4 年制にし，カリキュラムも変更した。

16 1906（明治 39）年から 1908（明治 41）年入学，1909（明治 42）年から 1911（明治 44）年卒業の各々の成績優秀者の進学先は，『高等学校入学，卒業及帝国大学卒業ノ三点ニ於テ各成績良好ナルモノノ他ノ二点ニ於ケル成績調』（慶應義塾大学図書館所蔵）で知ることができる。

17 前掲「誰れか一高の堅塁を抜く乎」，p. 127

18 少年園編『明治 35 年　東京遊学案内』（内外出版協会，1902），pp. 27-41

19 前掲「一高受験者心得」，p. 128

20 前掲「一高入学試験雑話」，pp. 125-126

21 前掲「誰れか一高の堅塁を抜く乎」，pp. 130-134

22 島溪生「東京中学と地方の中学」『中学世界』第 10 巻第 8 号 (1907.6), pp. 73-74

23 前掲「高等学校受験案内」，p. 47

24 同前，p. 46

25 京都帝国大学自彊会同人編『学界之先縦　青年修学指針』（東京博文館，1906），p. 175

26 同前，p. 175

27 安倍能成「落第と落第の前」辰野隆編『落第読本』（鱒書房，1955），pp. 14-15

28 「予備学校の衰頽」『教育時論』第 569 号 (1901.2), p. 37

29 「入学試験の今昔」『中学世界』第 9 巻第 4 号 (1906.3), p. 64

30 P. P. P.「受験学生の巣窟」『中学世界』第 10 巻第 12 号 (1907.9), p. 83

31 「専門学校入学志願者に告ぐ」（「学事顧問」内）『中学世界』第 9 巻 3 号 (1906.3), p. 163

32 紫雨「高等学校受験準備の一年」『中学世界』第 11 巻第 3 号 (1908.3), p. 121

33 内山常治「教壇に於ける斎藤先生」大村喜吉『斎藤秀三郎伝—その生涯と業績—』（吾妻書房，1960），pp. 292-295

34 「学事顧問」『中学世界』第 11 巻第 5 号 (1908.4), p. 150

35 「学事顧問」『中学世界』第 12 巻第 9 号 (1909.7), p. 135

36 平凡生「僕の受験経験談」『中学世界』第 12 巻第 4 号 (1909.3), pp. 150-151

37 前掲「近代日本における予備校の歴史」，p. 26

38 前掲「僕の受験経験談」，p. 152

39 同前，p. 152

40 たとえば中央大学では社員総会で高等予備校設立に対して否決の決議がなされた。

41 専門学校令と予備校の設立との関係については，前掲「近代日本における予備校の歴史」，p. 27 を参照されたい。

42 田中政男「「高等予科学生原簿」（第一号）に見る予科生の実態」『明治大学史紀要』10 (1992), p. 68

43 同前，p. 71

44 「私立明治高等予備校設立願」『資料　明治大学教育制度発達史稿』〔3〕（明治大学，1978），p. 27

45 「各科大学・各専門部学科及び講師」『資料　明治大学教育制度発達史稿』〔3〕，pp. 122-124

46 『日本大学七十年略史』（日本大学，1959），p. 150

47 「学事顧問」『中学世界』第 13 巻第 11 号 (1910.9), p. 142

48 米田俊彦『近代日本中学校制度の確立』（東京大学出版会，1992），p. 132

49 『東京開成中学校校史資料』（東京開成中学校，1936），p. 82

50 同前，p. 87

51 「設立願　開成予備学校」（1903（明治 36）年 10 月 16 日，東京都公文書館所蔵）

（付記）本論文は，文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。